

向井潤吉の歩いた時代

大正・昭和に残した画家の足跡

2006年12月2日 土 — 2007年3月25日 日



《伐木探》1943（昭和18）年

向井潤吉が画家として、そして一人の人間として生きた明治から平成は、日本社会が劇的に変化を遂げた時代でした。向井潤吉の創作の軌跡を顧みれば、そこには時代の様相が色濃く反映し、彼が時代と対峙し、時代から何ものかを読み取ろうとした痕跡が残されています。

明治から始まる西洋文明の積極的な受容は、一般社会のみならず、芸術の世界にも深く影響をもたらしました。油彩技術の流入により日本の「洋画」が開化し、その技法を次第に習得するにつれ、日本の画壇は西洋の美術とは一線を画する独自の「洋画」を模索していくようになりました。

浅井忠が創設した関西美術院に入門し、向井潤吉がそこで描いた若き日のデッサンからは、写実の基礎を学び取ろうとした真摯な画学生の意気込みが伝わってきます。また1927年からおよそ3年間にわたる滞欧期に描かれた泰西名画の模写には、初めて西洋美術と直接向き合うことから得た衝撃や感動、そして貪欲な向学心が窺えます。

時代が戦局へ向かうようになると、向井潤吉も多くの同年代の画家たちがそうであったように、従軍画家として、フィリピン、ビルマをはじめ様々な戦地を巡り、戦争記録画を描きました。記録画には、向井潤吉がそれまで培ってきた技術と画家としての情熱が存分に注がれましたが、同時に彼は戦場という極限状況に身を置くことで、生命の尊厳、そして人類が育んできた文化に関わる根源的な意義に、向き合うことにもなりました。

戦後間もなく描かれた《漂人》は、向井潤吉の戦争に対する心底からの感慨が表象され、さらに当時の世相を端的に映した作品といえます。戦争体験は、向井潤吉のそれまでの若々しい画学生的心情を寸断し、画家が社会の中で、あるいは歴史の中で果たしていくべき役割の重さを痛感させる大きな事件となりました。

こうした時代の大きなうねりは、画家としての意志を問い直す一つの転換期となり、やがて向井潤吉はその画業を代表する「民家」をモチーフとする作品へと邁進していくことになります。「民家」をモチーフとする

膨大な作品群は、高度経済成長というひとつの時代の裏側に潜む、日本のある一断面を描きとったものであり、向井潤吉の画業は、時代と不可分の関係にあったことが想察されるのです。

向井潤吉は、日本各地を訪れ、自分自身の眼で見て、そして肌で感じながら民家を描き続けました。草屋根の民家は向井潤吉にとって、時代に逆行した「過去」のモチーフではなく、自らの実体験から見出された厳然たる「風景」だったといえるのではないのでしょうか。向井潤吉が描いた民家のある風景には、時代に翻弄されながらも着実に営まれてきた人々の暮らしが描き込まれており、私たちに過去と未来をつなぐ新たな出会いと感慨を与えてくれているようです。



《不祥 (軍用機内無線)》1937~1944 (昭和12~19) 年頃



《漂人》1946 (昭和21) 年



《湖東の家 (滋賀県愛知郡湖東町)》1989 (平成元) 年



《遅れる春の丘より (長野県北安曇郡白馬村北城)》1986 (昭和61) 年